

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

タイトル：「東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学」（平成22年度第2回研究会）

日時：平成22年9月25日（土曜日）午後1時30分より午後6時

場所：本郷サテライト・キャンパス 5F会議室

報告者 ・ 報告タイトル：

発表1：愛知学院大学/名城大学 非常勤講師 賽漢卓娜先生

『中国人女性結婚移民の「移動の物語り」－「農村の花嫁」像を問い直す』

本発表では、賽漢卓娜先生が本州 A 市で実施したフィールド調査に基づいた、日本の農村へ結婚移住した中国人女性の結婚移住をめぐる「移動の物語り」の分析が発表された。

賽漢卓娜先生によれば、先生の調査対象となった中国人母親たちは、異文化間葛藤に直面しつつも、子供の教育に積極的にかかわる姿勢が見られた。母親たちは、境界に立つ子供の「リスク」を回避するための戦略をとっているという。そして母親自身も、子供を通じて人生を“選び直す”ことを目指す傾向がうかがえたという。つまり母親たちにとって、子供の教育は、数少ない自己実現の表現手段であるというのである。

こうした調査結果をつうじて賽漢卓娜先生は、中国人女性を行為者と捕らえることで、ステレオタイプ化された結婚移住女性像から脱却でき、その結果、より移動する女性および彼女たちを取り囲む社会に対する分析が可能になると指摘している。

発表2：恵泉女学園大学 人間社会学部 教授 定松文先生

『親密圏の労働と国際結婚移民』

本発表では、「なぜ女性はケア労働をするのか」「なぜケア労働者として女性が求められるのか」という出発点に立ち、無償労働によって「生き残りの女性化」の分析対象から外されがちな「隠されたケア労働者」としての結婚移民を、国際移民論の中に位置づける試みが発表された。定松先生によれば、近年の国際移民研究において、「生き残りの女性化」を中心とした女性の有償労働移動に関する研究がひとつの潮流となっている。

しかし、ここで取り上げられている女性移民のほとんどは有償労働に就いているケースであり、実質的に同じような再生産労働をしている結婚移民については、いくつかの例外を除いてはまだそれほど研究対象にはなっていない。そこで定松先生は、親密圏と再生産労働に焦点を当て、①ジェンダー、②再生産労働、③社会福祉制度のなかの家族と個人、④感情労働という4つの視座から、この点を検討している。

その結果、身分（家族）による移動と資格による移動、そしてそれを管理する国家というメカニズムのもとで、結婚移民は、身分による移動でありながら出身家族から経済的支援を期待され、婚姻による家族から情動による無償労働を、経済的に困窮した場合には市場での有償労働を期待される存在となっている点を指摘している。

発表3：岐阜大学 教育学部 准教授 仲潔先生

『教室の多言語化と言語教育：国際結婚／離婚に伴う言語問題を手掛かりに』

本発表では、国際結婚／離婚家庭における子供の言語問題に関して発表された。複数の事例にもとづく仲先生のご研究からは、以下の点が指摘された。

- ① 言語には、「正しさ」「通じる」を越えた、言語的力関係が存在すること。

言語には、多数派の日本人側の、言葉に対する無意識的な態度・価値観があり、これが「ことばの壁」となっている。つまり、外国人児童が、コミュニケーション手段としての日本語が「できる」場合にも残る「ことばの壁」が存在すること。

- ② 「ことばの乱れ」の再定義

言語は「乱れ」が常態であって、乱れていない状態の言語などは存在しない。その変化の要因には、性差・年齢差・地域差などを元にした基準が存在している。「日本人」の多様性だけでも「乱れ」が存在するとき、外国籍児童・生徒の増加は、この「乱れ」の加速を引き起こしている。しかしこれは逆に、外国籍児童・生徒の第一言語の多様性による不規則性・予測不可能性とあいまって、「正しい日本語」を問い直す視点を引き出す必要性が生まれているのではないかと。

- ③ 外国人児童への義務教育の保障が必要である点への提案

昨今、義務教育課程に就学を希望する外国籍児童が増加している。外国籍児童に教育を受ける権利の保障が必要とされている。しかし、今日義務教育課程で行われている言語教育は、言葉に対する価値観・認識は既成のままであり、言葉を単なるコミュニケーションの道具と位置づけたままである。

- ④ 「言語道具観に基づいた言語教育から、言語観教育への以降の必要性

これからの義務教育に期待される姿勢として、「正しさ」を前提とした言語道具観に基づいた言語教育から、「変な言葉遣い」という偏見を乗り越えるための言語観教育への移行が求められているのではないだろうか。これにより、外国籍児童に、言語を習得するためのエンパワーの要素が強くできるのではないだろうか。